

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

特注タイルが 空間を演出

県産建材の魅力を伝える岐阜県庁舎

岐阜県の新庁舎が2023年1月に開庁した。内外装には県産の建材をふんだんに使用。もちろんそこにタイルも含まれ、しかもほぼすべてが特注品という。県職員の方に、製作過程での苦労や注目点をお聞きした。

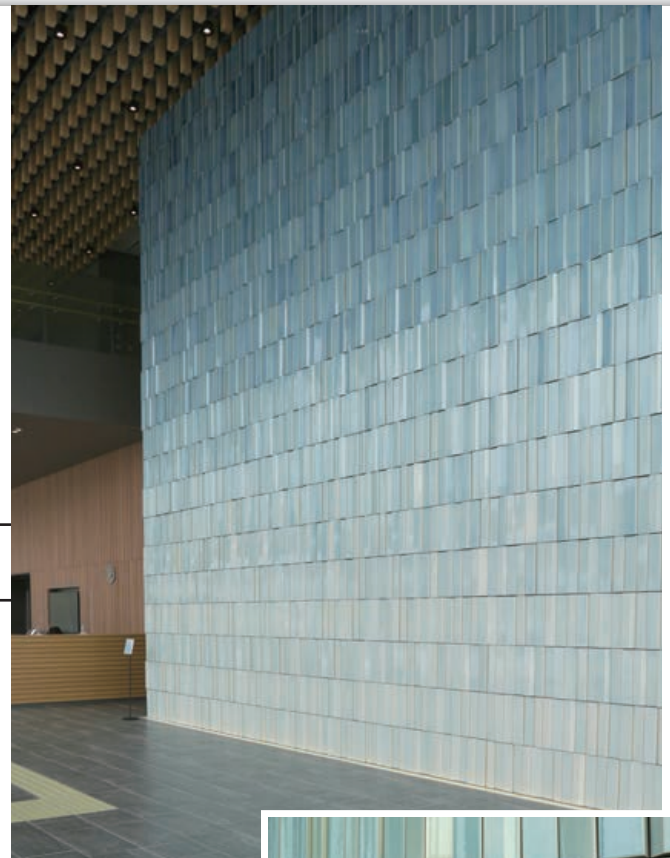
使用面積は約2万m²

岐阜県庁舎はJR西岐阜駅からバスで約10分の場所にある。手前に駐車スペースを備えた広い敷地に、地上21階の行政棟、地上6階の議会棟が並んで建つ。

最初に出会うのは、この2棟の外壁を覆う無釉タイルだ。夏の日差しの中で、鈍い光沢を放ち、県庁舎らしい落ちつきをもたらしている。

中に入れば、ヒノキやスギなどの木材や美濃和紙、タイルが空間を演出。淡い青色の施釉ボーダータイルは清涼感があり、体にまとった外の暑さがずっと引いていく気がした。

「県庁舎を岐阜のショーウィンドウのようにして、多くの人に岐阜の豊かな自然、伝統文化の魅力を発信していこう、というのがコンセプトです」と、新庁舎の整備



■議会棟・

1階エントランスホール
色の濃淡が9段階、4形状のタイルを使用。清流をイメージし、上部を濃く、下へ行くにつれ薄い色へとグラデーションになるように配置している。



を担当した杉山正和さん。各建材には解説板が添えられ、県産材であることが分かるように配慮がされている。

改めてタイルの使用面積を聞くと、なんと約2万m²。ほぼすべてが県庁舎のオリジナルのデザイン。それぞれのタイルが岐阜県の清流や滝、県木のイチイといった自然をイメージしていることが解説板にも書かれている。



左が議会棟、
右が行政棟。



各建材には解説板が
添えられている。

外壁タイル

剥落がないように留め具を用いた乾式工法で取り付けられている。



■行政棟(高層棟)
3形状のタイルを組み合わせている。
最も大きなタイルは605×447。



■行政棟(低層棟)

■議会棟



色むらを重視

デザイン図面があるとしても、特注タイルの製作には、型の作成、原料の土や釉薬の選定、試作品の製作といった多くの工程を要する。すべてのタイルが納品されるまでに約3年を費やしたという。

製作にまつわる苦労を伺うと、開口一番に「焼き上がりの色の調整が難しかったですね」と返ってきた。

これは外壁タイルの色のこと。目指したのは「色むらのある外観」。外壁は粘土の色を生かす無釉タイルとし、還元焼成で焼成した。タイルの焼成方法には、酸化焼成と還元焼成がある。還元焼成は、色幅が出て、焼き物らしい味わいのある仕上がりとなる。一方で、色の調整が難しく、焼き上がらないと色の出が分からない。さらに量が膨大なため、1社のメーカーでは担えず3社で製作という状況も加わった。想定した

色に仕上げ、さらに3社で色の統一感を出すため、何度も試作を要したという。

また、特注品のため当然、施工例がない。

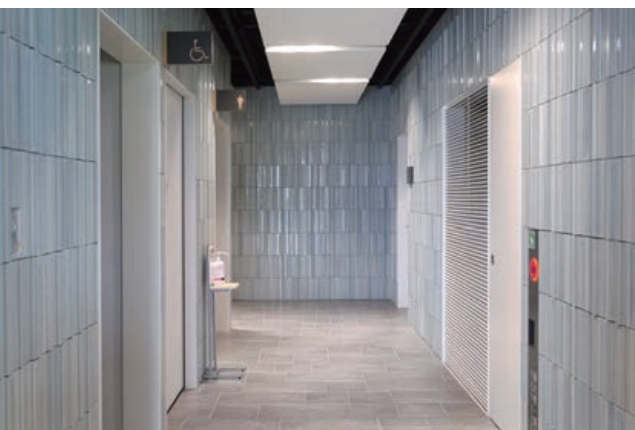
「タイルを一枚だけ見ても、張ったときの全体のイメージが分かりません。そこで高さ4メートルのモックアップ(実物大の模型)を製作し、朝昼晩、雨の日での光の違い、また角度を変えてどう見えるかを確認しました」。

光の当たり方までとは驚いたが、この念には念を入れた確認作業は、県庁舎の印象を決める外壁タイルだからこそだろう。

張ってみたら…何か違う!?

内装に使用した施釉タイルでも色にまつわるエピソードがある。

「試作品を見て、『これはいいね』とOKを出したのですが、その後に製作されたタイルで試し張りをしてみると、印象が違ったんです」



■行政棟/内装壁
清流をイメージ。色幅をもたせた3形状の施釉ポードータイルを組み合わせている。



■行政棟・議会棟/床
木々が清流の水面に映るさまをイメージし、緑がかった青色のタイルを使用。川の深さを表現するため、1階は濃い色、2階、3階と上の階に行くにつれ、薄い色のタイルを配置している。



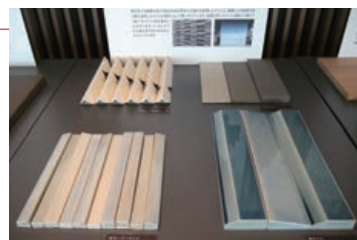
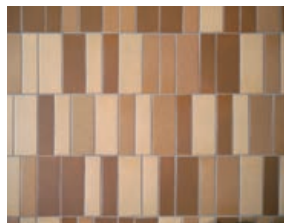
点字ブロックもタイルで製作。床タイルになじむような黄色にした。

■建材紹介コーナー
焼成方法や釉薬の解説が
されている。タイルのサン
プルも展示されており、形
状の多様さが分かる。

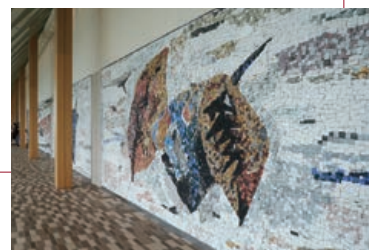


■行政棟／20階清流ロビー

360度がガラスで囲まれており、岐阜の町を一望できる。エレベーターを降りてすぐの空間は全長100メートル。床に敷き詰められたタイルは素焼きで焼き上げることで、素朴で自然な土の風合いを出し、清流ロビーの開放的で親しみやすい空間を演出している。



清流ロビーには旧庁舎にあった矢橋六郎作のモザイク壁画「春・夏・秋・冬」も移設されている。



■議会棟／吹き抜け

滝をイメージし、表面に細い線を施したタイルを使用。無釉タイルをメインに、施釉タイルを所々に配置し、釉薬のつやが水しぶきを表現。



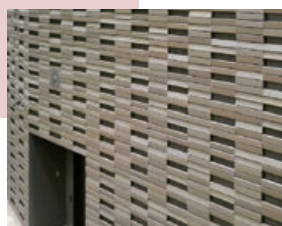
■議会棟／エレベーターホール

立体形状のタイルは、「イチイの葉」「レンゲソウの花びら」といった岐阜県ゆかりの植物がモチーフ。長さを違えた6形状、施釉と無釉のタイルを組み合わせて使用。



■議会棟／5階議場

3色の無釉タイルを組み合わせている。



その理由は一。試作品は少量の製作のため、釉薬を手掛けしていたのを、量産体制に入り、機械掛けに変更したことが一つ。加えて原料の土が異なっていたことも判明した。在庫が不足していたためだったが、試作品と同じ原料を探し出し、製作し直した。

焼成方法、釉薬の加減、原料の違いで仕上がりが大きく変わるのが焼き物であるタイルの面白さ、また難しさでもある。特注タイルなら尚更だろう。

デザインの周到さに驚く

そうした試行錯誤を重ねて完成したタイル。色の濃淡の美しさのほかにも注目してほしい箇所がある。

一つは形状と面状について。テーパーをつけたり、厚みや長さを変えたりし、何種類かのタイルを組み合わせで張っている。これにより壁面が単調にならず、豊かな表情を生み出している。

タイルの張り方も一様ではない。たとえば行政棟・議会棟の床タイルは、川の深さをイメージし、1階を濃い色、2階、3階と上の階に行くにつれ薄い色を配置する。見学者にそれを説明すると、「そこまで細やかに

デザインされているんですね」と感心されるという。色の違いは、言われなければ気づかないくらいさりげないが、そうした細かな配慮が全体の印象を決めるのだろう。

外壁に床や壁一。タイルは多種多様でありながら、共通するのは焼き物らしい存在感や力強さを備えていること。今後何十年にもわたって多くの人に使用される県庁舎にふさわしい。

県庁舎は開庁日なら自由に見学が可能。建物全体を見学した後は、20階清流ロビーの大空間で岐阜県産の木材を用いた椅子に座って景色を眺めるのもいいし、お腹がすけば2階の食堂も利用できる。

県外在住者が県庁舎を訪問する機会はまずないが、新たな観光スポットとして、訪れてみてはいかがだろう。

県庁舎の見学について

行政棟1～3階、20階および議会棟1～2階の一部は、開庁日の7:30～17:45の間は自由に見学可能。概略を記載したリーフレットや、見学ルートの案内図も用意されている。



岐阜県多治見市

多治見市モザイクタイルミュージアム

「アート」を組む人々

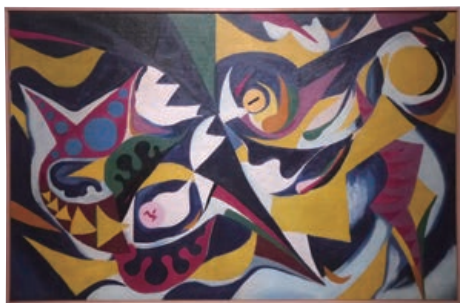
ミスズアートとモザイクタイル画の仕事

「アートを組む」とは、ここ多治見界隈で使われる表現で、モザイクタイルを組み合わせて絵画や模様を作ることの意味するという。この地でいかに多くのアートが作られてきたかを実感する。

今回の企画展は2020年に急逝した曾根研氏と、祖父が設立し、アートを組む職人を多く輩出した「ミスズアート・スタジオ」に軸に、様々なモザイクアートを取り上げた（展示は8月27日に終了）。

曾根研氏は、タイルのほかに食器や焼き物のかけらを使ってオリジナルの作品を制作。2016年にはスターバックスコーヒー名古屋JRゲートタワー店の壁画を手掛けている。丸い鏡の作品は、力強さや野性味を感じさせながら、一部は下地が見える未完の状態。解説には「体調が悪化する中、取り組んだ最後の作品かもしれない」とあり、「空白」部分の静けさが心に迫る。

奥の展示空間で存在感を放つのは、岡本太郎氏の絵画「青春」。1956年、祖父・錦二氏がこの絵を原画とし、モザイクタイル壁画を制作した。添えられたモノクロ写真には、5人の男女に指示する岡本太郎氏が写り、制作の様子が伺い知れる。原画は2009年に曾根研氏のご実家で発見されたというが、壁画のほうは失われているのが残念。



「青春」

銀座松竹会館 松竹セントラル劇場モザイク壁画原画。岡本太郎氏は10ミリの角のモザイクタイル画を数多く作った。岡本太郎／1956年／東京・岡本太郎記念館蔵

ミスズアート アルバムより
「静岡松竹」、「東京松竹会館」
ミスズアート・スタジオ／
1957年頃／個人蔵



鏡(未完)

「織部」を想起させる
緑や茶色を基調とし
た焼き物のかけらを
組み合わせている。
曾根研／制作年不明
／個人蔵



不明(ミニ額)

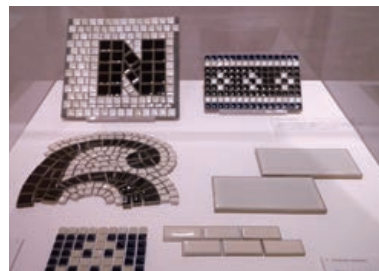
曾根研／制作年不明／
個人蔵



ながせ商店街モザイク画「炎」の試作
ミスズアート・スタジオ(曾根鈴代)／
1983年／個人蔵

松屋銀座地下鉄関連資料

2019年、松屋銀座の150周年を記念し、佐藤卓氏のデザインにより、地下鉄銀座駅がモザイクタイルで装飾された。モザイクアートの制作を手掛けた横井浩之氏はミスズアートで修業をして独立。銭湯のモザイクタイル画を数多く制作した。製造：山周セラミック、聖和セラミックス、杉浦製陶、オザワモザイクワークス／2023年／個人蔵



ビビッドカラーの作品は、母・鈴代氏が1983年に試作品として制作したもの。多治見市の商店街でこれを元にした壁画を今も見る事ができる。鈴代氏はチップタイル※とガラスを使って絵画作品を再現。小学校でも作品を制作している。

使われる素材や設置場所からは、その時代のモザイクアートのありようが伺える。小さな作品は実物が展示されているが、壁画は写真での紹介。現地を訪ね、実際の作品を空間ごと体験すれば、その時代の空気も感じられそう。まずは多治見市内にある新旧のモザイクアートを訪ねたい。今ある作品に注目することが、まちや建物が再びモザイクで彩られるきっかけになるといい。

※本展のスピノフ企画展が10月24日(火)～29日(日)、府中市美術館市民ギャラリー(東京都府中市)で開催される。

次回展示

「工場賛歌」焼成編

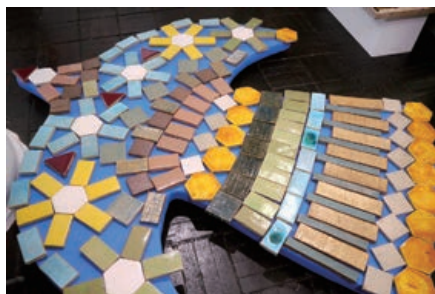
2023年9月9日(土)～2024年1月21日(日)
原料編、成型編、釉薬編に続く、
シリーズ第4弾はタイルの焼成工程に注目。

※モザイクタイル画用に考案された不定形な形状が特徴的なタイル。

泰山タイル展 一枚のタイルがつなぐ、縁。

三条通り沿いに建ち、星のモチーフが印象的な1928ビル。この2階のギャラリーで6月27日～7月2日まで泰山タイル展が開催された（主催：タイル専門商社・施工会社の中村タイル株式会社）。

訪れた7月1日はイベント開催日で、泰山製陶所の創設者・池田泰山氏の孫である池田泰佑氏、泰山タイル愛好家の柏原卓之氏が来場。会場は熱気に満ちていた。「東京からの来場者もありました。知らない人同士で話して盛り上がっています」と展示を担当した嵯峨広造氏。過去に開催したタイル製作のワークショップの動画も上映され、「体験してもらうことで一枚のタイルの価値を上げていきたい」と展望を話す。6月にオープンした公式サイトでは、泰山タイルが使用された建築物の情報を掲載。今後もその魅力を伝えていく。



泰山タイルとは、1917年に池田泰山氏が京都で創業した泰山製陶所で製作されたタイルで、その美しさが多くの人を魅了。多種多様なタイルは中村タイルの倉庫で50年以上保管されていたもの。



泰山製陶所の立体作品や、池田泰佑氏の集成モザイクの作品も展示。

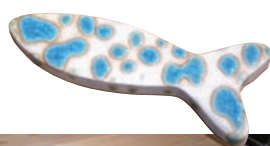
モザイクタイル・アーティストの中村ジュンコ氏による泰山タイルを使った作品。

石井春 時を旅する色・形・窯

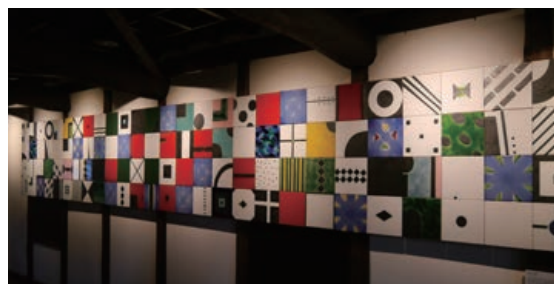
築100年以上、木組みをあらわにした空間に色彩豊かなタイルが映える。INAXライブミュージアム「窯のある広場・資料館」では7月18日まで石井春氏の展覧会が開催された。

石井氏はポルトガルの「アズレージョ」に魅せられ、30年にわたりオブジェやタイル作品を制作。今回の展示は2020年の「竹中大工道具館」の企画展で披露した作品に、新たに制作した3作品を加えた内容となっている。

「釉薬の鮮やかな色味、つや感、土の風合いに注目してほしい」と学芸員の高橋麻希さん。日本での制作は、LIXIL やきもの工房がサポート。「進むさかな」は白く焼き上がる京都の土を使い、淡い色あい、にじみを生かした仕上がり。うずまきや水玉といった模様も楽しく、作者の人の柄が伝わってきた。



施設内のやきもの工房で制作した「CUBEの小さな旅」(上)、「進むさかな」(左)。2種類の釉薬を重ねてかけるという新たな試みもなされた。両作品は、ミュージアムショップで販売中(数量限定、なくなり次第終了)。



ポルトガルで制作された「航海からの贈物」。

日本のタイル100年 美と用のあゆみ ミュージアムトーク「たてもの園でタイルめぐり」

MAPを手にいざ園内へ

昨年4月からスタートした巡回企画展「日本のタイル100年 美と用のあゆみ」が最終地・江戸東京たてもの園へ。7月22日に開催されたミュージアムトーク「たてもの園でタイルめぐり」に参加した。

連日の酷暑にもかかわらず、14時30分の開始時間には続々と人が集まってくる。企画展に合わせて製作された「たてもの園でタイルめぐりMAP」を手に、総勢30名ほどで出発した。

MAPにタイル使用の建物として紹介されているのは14棟。茅葺き民家を除く、多くの建物に使用されていることがわかる。今回は「常盤台写真場」「銀座煉瓦街の煉瓦」「万世橋交番」「花市生花店」「子宝湯」の5カ所を見学。学芸員の生田真菜さんの解説を、メモをとりつつ聞き、ときには質問するなど、皆さんとても熱心。最後に訪れた子宝湯は、浴槽や洗い場はもちろんのこと、外の腰壁、玄関床にと多様なタイルが揃う。さらにタイル絵も見られるというクライマックスにふさわしい充実ぶり。トーク終了後も留まって見入る人も多かった。

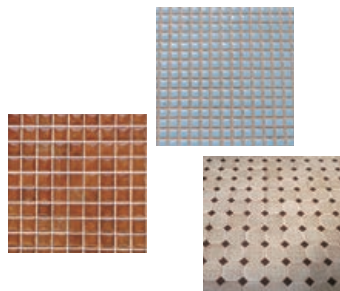


MAPは、江戸東京たてもの園のウェブサイトダウンロードできる。

園内タイルめぐりの
クライマックスは
子宝湯！



同潤会江戸川アパートメント
食堂タイル
山茶窯製陶所製／1934年(昭和9)*1



外壁スクラッチタイル
同潤会大塚女子アパートメント(左)／
廿世紀浴場(右)
1930年(昭和5)*1／1929年(昭和4)*2

*1: 東京都江戸東京博物館蔵 *2: 江戸東京たてもの園蔵



万世橋交番では「覆輪目地」について解説。



花市生花店のタイルは、緑と白の市松模様。奥の床には、踏まないことで店主の胃潰瘍の完治を願う1枚の願掛けタイルが張られる。

関東大震災とタイルの関係

展示を見るため館内へ移動。3館共通の展示内容に、たてもの園独自の企画として、「関東大震災からの復興とタイル」が加わる。関東大震災が発生したのは、タイルの名称が統一された翌年のこと。この震災を機に鉄筋コンクリート造が普及、その外装材としてタイルが重宝されることになる。一方、被害が少なかった帝国ホテルで使われていたスクラッチ煉瓦をきっかけにして、スクラッチタイルが大流行した。浅草の凌雲閣、御茶ノ水のニコライ堂や、同潤会アパートメントといった東京の有名建築の煉瓦やタイルが歴史を伝える。

共通の展示にも収蔵品を追加。「美術タイル」のコーナーでは、同潤会江戸川アパートメントの食堂タイルを展示。色合いの美しさに見とれてしまう。

トークの日とあってか、この日の来場者は多め。生田さんからは、巡回企画展は取材も多く反響が大きかったと聞いた。常滑と多治見でも見てきた、と話す人もいたそうで、京都に続き、全国を駆けめぐるタイルファンの存在を実感。巡回企画展は8月20日に無事終了を迎えた。今後タイル関係の催しに東京巡回ルートができると嬉しい。